

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：32402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04038

研究課題名(和文)健康と食の「リスクをめぐるコミュニケーション」に関する実証研究

研究課題名(英文)Empirical Studies of 'Communication Concerned Risk' about health and food

研究代表者

柄本 三代子(Enomoto, Miyoko)

東京国際大学・教育研究推進機構・教授

研究者番号：90406364

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：食品安全委員会を中心として、政府主導で行われる「リスクコミュニケーション」において、誰が排除されているのか、またその課題はどこにあるのかという点について考察した。放射能汚染により甚大な被害をこうむった地域において、はたして農業生産者や消費者らはその「リスク」をどのようにコントロールしようとしているのか、フィールドワークをおこなった。食と健康のリスクへの気づきがコミュニティ形成の関心へと結びついたCommunity Supported Agricultureの実践について、日本のみならずイギリスの事例についてもフィールドワークをおこなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

リスクをめぐるコミュニケーションの分析過程において、その複雑性と問題の在りかを突き止めた。それぞれのリスク認知、リスクの語り、リスクへの向きあい方を明らかにすることで、「市民」「国民」といった平板な視点では得られないオルタナティブなリスクコミュニケーションのあり方を提示した。リスク社会における新しい選択的行動の課題と意義を論じ、普通の人びと(laypeople)がリスクと向き合いながら生きる意味と、その対処の新たな方策について論じた。

国際学会にて、日本の健康と食をめぐる現状を特殊事例として論じるのではなく、日本におけるある種の先端的事例がいかに社会学理論の再編を迫るものであるか提言した。

研究成果の概要(英文)： In this research I discussed, in risk-communication which mainly delivered by the food safety commission in Japanese government, that some people are eliminated. And I pointed out that is our problem. As a part of field work, I researched the practice of Community Supported Agriculture (CSA) connected with concerned of 'creation of community', which based on Awareness of risk in food and health. In particular I made field work where in not only Japan but also UK.

In community suffered serious damage caused by the radioactive contamination, I investigated how agricultural product producers and consumers control the risk by making field works.

研究分野：社会学

キーワード：リスク 健康 食 リスクコミュニケーション 農

1. 研究開始当初の背景

政府主導のリスクコミュニケーションの文脈においては、「市民」の役割の重要性が指摘されてきている。これに関して、一方向的で啓蒙的なリスクコミュニケーションへの批判から「市民」対話型への進展/改善への言及がある。いっぽうで、リスクコミュニケーションが十全に機能しているわけではないとの認識もあり、「より適切かつ効果的なリスクコミュニケーション」の推進が目されてもいる。(食品安全委員会

https://www.fsc.go.jp/osirase/pc2_ri_arikata_270527.data/riskomiarikata.pdf)

この現況を出発点として、健康や環境や食にかかわるリスクについて考える際に浮上する、現に生じている多方面での機能不全について本研究では考察する。

健康や食に関するリスクを人びとがどのように認知するのかという研究課題において、これまで人びとの属性などとの関連性について具体的かつ十分に議論されてきたとは言い難い。少なくとも現代日本社会においては、環境リスクや健康リスクへの配慮に関して、「市民」「国民」「消費者」としてのリテラシーと責任、といったように、さまざまな人びとを「等しく括る」言説が多々みられる。そこでは「科学的に正しい理解」や「合理的な態度」といったことが暗黙の前提となっており、科学リテラシーを有する「よき市民」になることが重要視され期待されている状況がある。しかしリスクや不確実性をめぐる語り、線引き(安全か安全でないかなど) 関心のもち方や理解の仕方、配慮の仕方はさまざまであり、そのことによって人びとは分断されている。たとえば良好な関係性を維持するために「放射能汚染」などある特定のリスクについて語らない/語れないという状況もある。

何らかのリスクをどのように理解するか、どのように対処するか、ということは、どのように生きるか、何を価値あるものとして選ぶとのか、ということと等しい。そこに「科学」や「正しさ」「客観性」が介在している。

2. 研究の目的

健康や食をめぐるリスクについて人びとの関心は高まり、いわゆるリスクコミュニケーションの重要性と必要性が指摘されてきている。これは主として政府主導でおこなわれているものであるが、その政治性と不可能性を考察することによって、リスクをめぐるコミュニケーションの限界について指摘することは今日的課題と断言していいだろう。

これにあわせて、いずれにせよ生活に密着したさまざまなリスクについて、人びとはどのように認識し行動しているのか、という点についても実証的に論じるなどして、合理的意思決定を行う「市民」を自明視した政策・技術としての現行リスクコミュニケーションについて批判的に検証する必要性も出てくる。必ずしも「合意」することを前提としない「リスクをめぐるコミュニケーション」という実践を観察記述し、その可能性について積極的提言の可能性も含め考察を深める。

3．研究の方法

文献研究は本事業期間中一貫しておこない、最新の学術的知見を検討するいっぽうで各種資料を収集しながら、具体的に調査を設計していった。文献については国内外のリスク（社会）に関するものを渉猟し整理した。資料としてはたとえば、政府を中心とした「リスク管理機関」や「業界団体」他のステークホルダー（利害関係者）がこれまでに作成してきた資料を収集し分析した。健康や食をめぐるリスク言説の大まかな構造を整理することにより、インタビューやフィールドワークを中心とした実証的研究の分析枠組みを検討した。並行して、調査対象とフィールドの検討と準備を進め、仮説を構築しつつインタビューを実施した。具体的には、放射能汚染の被害が甚大であった福島県内および首都圏、海外（イギリス）における、さまざまな団体や個人の取り組みについてフィールドワークおよび聞き取り調査をおこなった。

4．研究成果

食の安全をめぐって、いかなる消費者（像）が「よき市民」として奨励されているのかについて考察した。政府による「消費者市民社会」などの検討をおこなうことにより、自明視された「正しさ」に従う市民像がそこでは想定されていることを明らかにした。このことは一方で、放射能に汚染された地域などで、健康や食のリスクにその場その場その時その時に対処しようとする具体的に活動する人びとの実践について検討することの重要性を意味している。そこで福島県の中でも二本松市を中心としたフィールドワークとインタビュー調査をおこなうことにより、食の安全を守るためには震災前からの消費者とのつながりが重要であったことを明らかにした。

以上に関連して、農薬を投入することを是とする近代農業に異をとらえてきた、運動としての有機農業に着目した。彼女らの運動はたんに農薬を使用しないということではなく、高度消費社会の仕組みそのものを再検討する視座を有するものであり、リスクをめぐるコミュニケーションも、たんにくだんの食品リスクを取り除くということではなく、関係性を構築していくことに主眼が置かれているものであった。この流れは、Community Supported Agriculture (CSA) といったかたちでも国内外において現在展開されており、リスク社会におけるさまざまな課題を共有する関係性の中で、なんらかの対処法を模索する動きへとつながっていることをインタビューなどによる調査によって明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柄本三代子	4. 巻 25
2. 論文標題 身体と食の公共性を奪うもの 2020年東京オリンピック・パラリンピックという社会的装置はいかに機能するか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 スポーツ社会学研究	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柄本三代子	4. 巻 62
2. 論文標題 リスクコミュニケーションという「民主的な装い」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 応用社会学研究	6. 最初と最後の頁 87 99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Enomoto, Miyoko
2. 発表標題 How can we communicate with others about food risk?
3. 学会等名 International Sociological Association（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柄本三代子
2. 発表標題 放射能汚染をめぐる食の安全において後景化するつながり
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柄本三代子
2. 発表標題 食の安全をめぐる政府広報とマスメディアの責任
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柄本三代子
2. 発表標題 リスクディスコミュニケーションが生みだす食への不安 「コミュニケーション」の狭隘な理解はいかにして可能か
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柄本三代子
2. 発表標題 食の安全をめぐる「コミュニケーション」の批判的検討
3. 学会等名 科学技術社会論学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ENOMOTO, Miyoko
2. 発表標題 Being “good” and “smart” consumers: Communication about food risks
3. 学会等名 International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 柄本三代子
2. 発表標題 食をめぐる政治的関心とその変遷 運動としての『有機』から『オーガニック』へ
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----